『商品による商品の生産』への スラッファの歩み

A Note on Sraffa's Path to *Production of Commodities by Means of Commodities*

松 本 有 一

Sraffa's *Production of Commodities* had a long gestation period of over thirty years. There are many unclear matters in the course of preparing *Production of Commodities*. What contents has "a draft of the opening propositions" which Keynes read in 1928 ? This paper is a preliminary investigation to clarify the unclear matters utilizing materials of Sraffa Papers reserved at Trinity College, Cambridge.

Yuichi Matsumoto

JEL：B31
キーワード：スラッファ、『商品による商品の生産』、スラッファ・ペーパーズ
Key words：Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities*, Sraffa Papers

はじめに

ピエロ・スラッファ（Piero Sraffa）は『商品による商品の生産』（Sraffa (1960)、以下では『商品の生産』と略記することがある）の序文で次のように記している。

「1928 年に、ケインズ卿が本書の冒頭の諸命題の草稿を読んだときに、卿は、もし収穫不変が仮定されないとすれば、その趣旨について明確な注意が与えられるべきだと、勧めてくれた。」「1920 年代の終りのころに、中心的な命題は形をととのえていたけれども、標準商品、結合生産物、それに固定資本のような特定の論点は、30 年代と 40 年代の初期に仕上げられた。1955 年以後の期

間には、本書が旧稿の束からまとめられたのであるけれども、（例えば「基礎財」と「非基礎財」の区別を結合生産物のばあいにあてはめるような）その仕事の途中で明らかになったギャップを埋めることを除けば、ほとんど何も付加されなかった。」[1)]

スラッファが自身の著作の「中心的な命題」の形をととのえてから、その出版までに 30 年を超える長い期間がかかった理由の一つに、そして最大の理由であると思われるが、『リカード著作集』（*The Works and Correspondence of David Ricardo* のタイトルで刊行された[2)]）の編集作業があったことは間違いない。スラッファが『リカード著作集』の編集にとりかかったのが 1930 年で、本巻の 10 巻の出版が 1951 年から 1955 年、総索引の第 11 巻の出版は 1973 年であった。『リカード著作集』の編集・出版にこれほどの期間がかかった理由を問うことは本稿の課題ではない。しかし、1928 年には「中心的な命題」が形をととのえられていて、そして出版されたのが 1960 年 5 月であるが、『商品の生産』の完成までの 30 年を超す歳月で、「旧稿の束」からの取りまとめからでも 5 年、最初の構想が何ら変わることなく研究が進められたのだろうか。というより 1960 年に出版された形での出版構想がいつできたのか、スラッファに関心を持つものなら誰しも思うことであろう。となると、スラッファが序文で述べていることをそのとおりに受け取ってよいのか、という思いも生まれてくる。あるいは 1920 年代の終わりの時点で『商品の生産』のような著作の出版をスラッファは考えていたのだろうかという疑問もわいてくる。

本稿は筆者が調査した、英国ケインブリジのトリニティ・コレッジ・ライブラリー（Trinity College Library）に所蔵されているスラッファ・ペーパーズ（The Papers of Piero Sraffa または Piero Sraffa Papers と表記される）の資料にもとづいて知りえた限りではあるが、1927 年ころから 1960 年の『商品による商品の生産』の出版にいたる、スラッファの大まかな足取りをたどってみようというものである。詳細な検討は今後の課題である。

1) Sraffa（1960）からの邦訳引用文は菱山泉・山下博訳による。
2) 出版された邦訳書名は『リカードウ全集』だが、本稿では編集作業がはじまった段階からを含めて『リカード著作集』と呼ぶことにする。

本論に入る前にスラッファ・ペーパーズの概要を記しておこう。

I　スラッファ・ペーパーズの概要

スラッファは 1898 年に生まれ 1983 年に亡くなった。彼が収集した稀覯書を含む蔵書と書き残したノート類やその他の文書（私的なものを含む）が、彼がフェローを務めていたケインブリジのトリニティ・コレッジ（Trinity College, Cambridge）に残された。蔵書は比較的早く整理され閲覧できるようになったが、ノート類の整理は時間がかかり、またその出版が計画されていて、出版の後でなければオリジナルノート類は公開されないということであった。しかし、どのような事情があったのかはわからないが、整理作業が済みカタログ（目録）が出来上がった段階の 1994 年に、それらのノート・文書類がスラッファ・ペーパーズとして公開されることになった。他方、出版計画は、スラッファの文書・著作の管理者であるガレッニャーニ（Pierangero Garegnani）の編集によって進められると当初伝えられていたが、その後ハインツ・クルツ（Heinz D. Kurz）が中心になり編集作業が進められおり、いずれ出版されることが伝えられている[3)]。

スラッファ・ペーパーズが公開されてから、そこに収められたノート類に基づく研究論文も出始めた。筆者は遅ればせながら、2009 年 4 月初旬から約半年間スラッファ・ペーパーズの調査にあたる機会を得た（調査の第 1 日目は 4 月 6 日、最終日は 9 月 11 日）。スラッファ・ペーパーズの概要は Smith（1998）、Kurz（1998）などで紹介されているが、外形的な面に限ってであるが簡単に整理をしておきたい。

スラッファ・ペーパーズが公開されるまでに関しては、トリニティ・コレッジ・ライブラリーの Cataloguer であり Archivist であるジョナサン・スミス（Jonathan Smith）が前出の Smith（1998）で紹介している。また、現在ではスラッファ・ペーパーズのカタログ（目録）はウェッブサイトで公開されている。その意味ではカタログは公刊されているに等しい。

3)　Salvadori（2005）によると 2000 ページにおよぶという。

スラッファ・ペーパーズの全体はつぎのように A から J の 10 項目に分類されている。

A：Personal and Family Papers
B：Academic Career
C：Correspondence
D：Notes, Lectures and Publications
E：Diaries
F：Memories of colleagues
G：Publication of others
H：Bibliographical and manuscript interests
I：Items removed from printed books
J：Miscellaneous

各項目は枝番号でさらに分類される。D に関していえば、D1 は Notes で D1/1 から D1/92、D2 は Lectures で D2/1 から D2/8、D3 は Publications でスラッファによって出版された論文などのタイトルごとに整理されていて D3/1 から D3/14 まであるが、特に『リカード著作集 *The Works and Correspondence of David Ricardo*』、『商品による商品の生産 *Production of Commodities by Means of Commodities*』に関連した文書は、それぞれに細かく分類されファイルされている。前者は D3/11/1 から D3/11/240、後者は D3/12/1 から D3/12/115 である。分類されたファイルごとにごく簡単な内容と執筆時期（推定を含む）がカタログに記載されている。そしてカタログ記載事項に含まれるキーワードによってインタネットでの検索が可能である[4)]。

4) 以前はトリニティ・コレッジ・ライブラリーのウェッブサイトからスラッファ・ペーパーズのカタログへの直接のリンクがあったが、あるときから Janus へのリンクに変更された。Janus はケインブリジの大学やコレッジに所蔵されている文書カタログ（catalogues of archives、現時点で 1800 を超えるカタログ）へのアクセスを提供しているサイトである。たとえばスラッファに関していえば、ケインズ・ペーパーズに含まれる関連文書等の所在も検索することができるが、スラッファ・ペーパーズのカタログの一覧を表示するにはやや使いづらい。スラッファ・ペーパーズのカタログが掲載されているサイトの URL は Salvadori（2005）に記載されているので、それを利用することができる。

スラッファ・ペーパーズのうち『商品による商品の生産』に関する文書のファイルとして分類整理されている D3/12/1 から D3/12/115 の 115 のファイルであるが、D3/12/111 は大部であり、さらに 8 つのフォルダーに分けて保管されている。

スラッファ・ペーパーズに残されているノート notes、草稿 drafts など（とくに区別が必要な場合をのぞいて以下ではノート類という表現を使うことにする）の全体的な印象をのべておく。スラッファはとにかく書いたものはすべて残しているのではないかと思われるほど大量のノート類が残されている。「すべて残している」と思われるのは、ノート全体に×印があるものや数値の計算過程だけが書かれた断片さえ残されていることから得た印象による。なお、スラッファのノート類というのは、ノートブックとして綴じられているものを使っていることは極めて例外的で、一枚一枚ばらばらの用紙である。1928 年から 1931 年の 3 学年度に行った「価値論講義 Advanced Theory of Value」（D2/4）の場合は、最初のほうはタイプ打ちであるが、ほとんどが手書きで、ほぼ同じ用紙に記されている。このような講義用ノートでない場合、さまざまな用紙が使われている。もちろん時期によっては同じサイズのルーズリーフがまとまって使われている場合もあるが（例えば Gehrke and Kurz（2006）で紹介されている、ボルトキェーヴィチ（L. von Bortkiewicz）の論文を読んだときのノートが収められている D1/91 は、3 穴のルーズリーフがバインダーに綴じられている）、またサイズの揃った用紙である程度まとまった枚数に記述されている場合もあるが、使用済み封筒の白紙部分、ホテルの便せん・メモ用紙、会議録の裏面、請求書の裏面、『リカード著作集』の校正刷の裏、その他手近にある記入可能な用紙は何でも使ったという感じである。『商品の生産』の印刷所に渡たされた原稿はタイプ打ちだが、タイピストに渡した原稿は『リカード著作集』の校正刷の裏なども使われていた。

『商品による商品の生産』関係のファイルは 115 あるが、各ファイルは基本的にはスラッファ自身が分類整理した状態を保存していることになっている。実際、各ファイルを開くと、さらにスラッファ自身が使用していた紙製の文書フォルダーにノート類が収められた状態の場合があり、そうでなくてもスラッ

ファ自身が内容を記したフォルダーがいっしょに収められていることがある。1955 年にマヨルカ（Majorca）島で「旧稿の束からまとめる」作業をはじめとき、ノート類の整理をしたあとがあり、その後も、使えるもの、使えないものを分けてファイルしていたりする。とはいえ、使えないものも保存しているのである。

II　冒頭の諸命題

本論にはいることにしよう。

スラッファが『商品による商品の生産』の序文で言及した 1928 年の「冒頭の諸命題」であるが、それと明確にわかる草稿は残念ながら見つけることはできなかった。スラッファ・ペーパーズに依拠した先行諸論文でも「冒頭の諸命題」の草稿を特定したものはない。ただ、スラッファがそれを 1928 年にケインズに見せたという点に関しては検討の余地がある。

そもそも「冒頭の諸命題」をふくむ草稿（a draft of the opening propositions）は最初から著書ないし論文のために準備された草稿だとは考えにくい。スラッファは 1927 年 10 月にケインブリジ大学の経済学講師（University Lecturer of Economics）に採用され（採用が決まったのは 1927 年 5 月）、まずは価値論の講義（講義名は Advanced Theory of Value）をすることになっていた。講義ための準備ノート類が残っている。スラッファ・ペーパーズの D3/12/3 はその一つで「“Notes: London, Summer 1927（Physical real costs etc)”」とカタログに記されている（カタログ記載事項で引用符 “　” を付された部分はスラッファ自身の記載に基づく）。10 月からの講義のための準備をいつから始めたのか正確な日付は定かではないが、遅くともケインブリジに赴任するまえにロンドンで準備をしていたことになる。ケインブリジ大学講師としての 1 年目の講義は、結局はされなかったが（いったんは延期の告知が出て、最終的には取りやめになる）、2 年目の 1928 年には実施され、スラッファ・ペーパーズの D2/4 がその講義ノートである（講義内容に関しては千賀（2002）、Hollander（2000）、Porta（2001）、Signorino（2005）など参照）。1 年目の講

義は行われなかったが準備はつづけられていたのである[5]。

そのような状況のなかであるが、ひとつ重要な証言がある。それは 1927 年 11 月 28 日（月曜日）付で. ケインズ（John Maynard Keynes）が妻リディア（Lydia Lopokova）にあてた手紙である。その手紙でケインズは「土曜日に私はスラッファとかれの仕事にかんして長く話しました。かれの仕事は非常に興味深く独創的 original です。だがかれが講義をしたときかれのクラスはそれを理解できるか心配です」と書いている（Gilibert 2006, p.35）。「土曜日」とは手紙の 2 日前の 11 月 26 日の土曜日と考えられる。1927 年 11 月 26 日に関してはスラッファ側にも記録がある。スラッファの手帳の 1927 年 11 月 26 日に「K. approves 1st equations」（de Vivo 2003, p.5）と記していることと、ノートの中にもこの日にケインズと会ったことが記されていることである（D3/12/4: 15）。手帳にある「1st equations」とは『商品の生産』第 1 章の生存のための生産で示された方程式に対応するものであることが明らかになっている（de Vivo（2003）、Gilibert（2003）、松本（2009）など参照）。そうであるなら、スラッファが「冒頭の諸命題」をケインズに最初に見せたのは 1928 年ではなく 1927 年 11 月 26 日である可能性が考えられるのである。

もう一点指摘しておかなければならないのは、ケインズの手紙でわかるように、スラッファの 1st equations は価値論講義の準備過程で考えられたものであり、最初から著作や論文の準備過程で生まれてきたものではないことである。1927-28 年ころのスラッファのノートを見ると、さまざまな形で equations（連立方程式）が多数記されている。

III　『リカード著作集』の編集とスラッファ自身の研究

スラッファは 1927 年に価値論講義の準備過程で新たな研究課題を見つけ出した。結局それは『商品による商品の生産』という形で世に出るのだが、30 年

5) スラッファが一年目の講義をしなかったことに関してはさまざまなことがまことしやかに伝えられているが、結局は講義の準備が間に合わなかった（講義用のノートが出来なかった）ことが最大の理由だと考えられる。当時の講義は、教師が準備したノートを読み上げ、学生はそれを書き取るというスタイルだったようである。

以上もかかったことになる。序文では触れられていないが、これだけの準備期間を要したのは、研究課題の困難さだけではない。『リカード著作集』の編集があったことは疑う余地がない。スラッファ・ペーパーズで『商品の生産』に関したノート類として分類されている D3/12 の各ファイルをみると 1927 年から 29 年にかけての一連のノート類の次にまとまってあるのは 1942 年から 1945 年である。1930 年から 1942 年にかけては（1931 年や 1932 年 5 月の日付のノートもあるが）研究の進展はほとんどなかった期間といってよい。この期間は明らかに『リカード著作集』の編集に集中していた時期である。

スラッファは 1927 年 10 月にケインブリジ大学の経済学講師として採用され、最初は 3 年間の任期で、1930 年に再任されテニュア（定年までの任期）を得たが、再任後 1 年で辞職した。大学講師としての講義の負担は各学期に週 2 回（1 回は 60 分）の講義であった。スラッファは 1 年目に講義をしなかったことはすでに述べたとおりである[6)]。

スラッファの講師への採用が決まったのは 1927 年 5 月 30 日で、すぐにケインズから知らされた。それに対するスラッファからの返信の下書きがスラッファ・ペーパーズに残されているが、講義開始の 10 月までに準備はできるだろうという旨が記されている。また 1927 年の夏にロンドンで講義の準備をしたときのノートも残っている。ロンドン・ノートには講義プランが記されている。1927 年のミカエルマス学期（Michaelmas Term、10 月－ 12 月）の講義は延期されたが、その間も準備をしていたことはケインズの証言からもうかがえる（前出の 1927 年 11 月 26 日付リディア宛手紙）。しかし、結局は 1 年目の講義は取り止めになったのだが、それに関してスラッファは大学あてに 1 年間の休職扱いの願いを出し、すでに得た給料を返納する旨伝えている。最初の 1 年間は無給休職の扱いにすることを大学（General Board）は認めた。

1 年遅れでスラッファは講義を始め、1928-29 学年度はミカエルマス学期とレント学期（Lent Term、1 月－ 3 月）に各々週 2 回価値論の講義をし、イースター学期（Easter Term、4 月－ 6 月）には週 2 回、大陸ヨーロッパの金融

6) スラッファがケインブリジ大学の経済学講師に採用されたときのケインブリジ側の事情に関しては松本（1992）参照。

制度の講義をした（講義名は Banking on the Continent）。1929-30 学年度も同様であった。しかし、講師職が再任され定年までの任期を得た 1930 年にはミカエルマス学期の講義はなく、レント学期とイースター学期に価値論の講義をしただけであった。1930 年のミカエルマス学期になぜスラッファの講義がなかったのかについては、これまで不明であったが、その理由がスラッファ・ペーパーズの調査でわかった。

スラッファは 1930 年 3 月に王立経済学会の事業であった『リカード著作集』の編集者に任命され、ただちに編集作業に取り掛かった。この時点では『リカード著作集』の編集にそれほどの時間がかかるとはスラッファは考えていなかったのであろう。1930 年中にはおおよその作業を終えられると考えていたふしがある。それは 1930 年のミカエルマス学期に講義をしなかったことと関係する。残されている文書によると、スラッファは大学あてに 1930 年ミカエルマス学期の休職願いを出し、有給休職が認められている（1930 年 6 月 13 日付で General Board の決定が通知されている）。スラッファが休職願いを出した理由は、『リカード著作集』の編集に専念して 1930 年の終わりまでに作業を完了したいというものであったと考えられる。

1930 年末までに『リカード著作集』の編集は終わらなかった。そして結局スラッファはケインブリジ大学の講師職の辞職願を出し、1931 年 5 月に大学（General Board）で認められることになる。その理由を記した文書を見つけることは出来ていないが、『リカード著作集』の編集作業に専念して、早く作業を終えて自身の研究にもどりたいということがあったように考えられる。それに関する状況証拠でしかないが、ロックフェラー財団（Rockefeller Foundation）のフェローシップへの応募がある。

スラッファは『リカード著作集』の編集を終えたあと、ロックフェラー財団のフェローシップを得てイタリアで自身の研究に専念する希望を持っていた。1932 年 10 月にはそのための働きかけがピグー（A.C. Pigou）やケインズによってなされていて、実現が可能な状況が遅くとも 1934 年はじめまでには、おそらくは 1933 年春頃にはできていたようである。1933 年 3 月時点ではその年の 10 月までにはリカードの編集を終えたいという希望をスラッファ

はロックフェラー財団の担当者に伝えていた。さらに 1934 年 2 月にはロックフェラー財団の担当者から、公式の応募書類を改めて出す必要はなく、いつからフェローシップになりたいか知らせるようスラッファに連絡があった。スラッファは、1934 年 10 月か 1935 年 1 月にはと考えているがまだ確定できない旨、返事をしたようである（以上、B12/1 の資料より）。

ではロックフェラー財団のフェローシップを得てスラッファは何をしようとしていたのか。それは 1927 年の価値論講義の準備過程で得たかれ自身の研究課題を果たすためであったと考えられる。しかし、結果的には『リカード著作集』の編集が終わらなかったため実現しなかったのであろう[7)]。

IV　1927 年〜1932 年

スラッファは『商品による商品の生産』の序文で「1920 年代の終わりのころに、中心的な命題は形をととのえていた」と記している。この記述をそのまま読むと『商品の生産』の少なくとも第 1 章、第 2 章に関しては、1920 年代の終わりまでにまとまった形の草稿 draft がつくられていたように思われる。だがそうなのだろうか。スラッファは自身のノートや草稿をほとんど全部残していたと考えられる。過去に記したノートを読み返して、追加記述をしたり書き直したりしていることがあるし、1955 年に出版に向けた準備を始めたときにも過去のノートを読み返し再整理している（その跡が残っている）。そうであるなら、1920 年代終わりのころの、「中心的な命題」を記した草稿が残されていてもよいはずだし、少なくともそのような草稿を利用した形跡があってもよいように思われる。残念ながら、1927 年から 1928 年のノート類で「中心的命題」が記された草稿の存在・特定の指摘はいまのところ誰もしていない。

スラッファ・ペーパーズのなかにそのような草稿が残っていなくても、スラッファの序文の記述内容をそのまま受け止めればよいと考えることもできよう。だが残されている草稿をみるかぎり、簡単にはそのように考えることはできないのである。スラッファは 1955 年 1 月から 3 月にかけてマヨルカ島のパ

7)　スラッファは 1935 年 10 月にケインブリジ大学経済学部所属の Assistant Director of Research に任命され、大学の職に復帰した。これに関しては松本（1992）参照。

ルマ（Palma）で「旧稿の束からまとめる」作業を始めたのだが、その際に作成した『商品による商品の生産』のための通しでの草稿は（まだこの時点では著作のタイトルは決まっていなかった）、結果的には現行の第 1 部の途中までで終わっているし、数値例は現行版とは異なっている。1956 年 3 月ころに手書き原稿をタイプ打ちに出して出版に向けての原稿作成が本格化するが、最初のタイプ原稿は現行の第 4 章に相当する部分までであった。それもさらに修正が加えられ、第 2 回目のタイプ打ち原稿、さらに修正をして印刷組版に出し、校正でさらに修正をするというように、テキストの確定までには紆余曲折するといった感がある。

1927 年夏から 1932 年 5 月までのスラッファのノート類の状態について補足しておこう（ノートに記された日付は、筆者が確認した限りでは 1932 年 5 月のつぎは 1942 年にとぶ）。

D3/12/2 は、カタログでは執筆時期が 1926-55 年とされている。しかし筆者が調査した限りでは 1926 年に執筆されたと判断できるノート類の存在は確認できなかった。D3/12/2 は、スラッファが過去のノート類を 1955 年に整理してフォルダーにまとめたものの 1 つで、カタログでは「Notes, including some workings by Frank Ramsey and Abram Besicovich」と記されている（カタログには Besicovitch ではなく Besicovich と記載されていて、スラッファもノートなどで両方の綴りを用いている）。ここに収められている 1927 年 11 月末（‘End of Nov 1927’）のノートでは、剰余がない場合=第 1 方程式（1st equations）に関しては交換価値の決定は解けていたが、剰余がある場合に関してはまだ解法は見つかっていなかった。

『商品による商品の生産』につながる最初の、というより直接にはケインブリジ大学での価値論講義のための最初の準備ノートは、D3/12/3 の「Notes ／ London, Summer 1927 ／（Physical real costs etc）」（／は改行を示す）と題されたノートであろう。このノートは時期的にも内容的にも、1927 年 10 月からの講義で何を取り上げ、何を学生に話そうか、そういうことを書き留めたノートであることは間違いない。講義で取り上げることを考えていた項目が列挙されているノートがある。ノートの表題に「Physical real costs etc」と記さ

れているが、スラッファはこの概念をペティ（William Petty）に負っている。

均等な剰余率（均等利潤率）の場合の定式化は 1927 年− 28 年冬のノートの中にあり、「冒頭の諸命題」の草稿らしきものもある（D3/12/6）。D3/12/7 のなかに、著作のための草稿と考えられる 1931 年の日付をもったいくつかのまとまった記述がある。それらが著作のための最初の原稿であるならば、価値論講義の準備で触発されたものと考えうるし、少なくとも 1960 年の『商品による商品の生産』とは異なる、学説史的な内容や先行諸学説の批判を含んだ大部の著作をスラッファは考えていたのではないかと推察させる内容をもっている。

いずれにしても、剰余を伴う場合に均等利潤率を前提した連立方程式で交換価値を解く方法は遅くとも 1928 年秋までには明らかになっていた。そのような解法を記したノートは複数存在する。

V　1940 年代

1942 年になってから、ほぼ 1946 年の終わり頃まで（1947 年 1 月のものもあるが)、『商品による商品の生産』関連のノート類が多く作成されている。これは『リカード著作集』の編集が一段落したことによると考えられる。ところがミル−リカード文書の発見（1943 年 7 月）によって『リカード著作集』の編集の組み替えがされることになり、スラッファ自身の研究はまたも中断することになる[8)]。

1940 年代になってからのスラッファのノート類のうち筆者が確認できた最も早い日付は 1942 年 7 月 2 日である[9)]。また、研究計画を記したものと思われるノートが残っている（D3/12/16:41-44）。ローザ・ルクセンブルク（Rosa

8)　ミル−リカード文書の発見に関しては Sraffa（1951）参照。『リカード著作集』の編集はミル−リカード文書の発見によって、版の組み換えを余儀なくされるとともに、第 2 次世界大戦によっても作業の遅延が余儀なくされた。戦争によってスラッファは一時的であるがマン島に収容されたり、大学で講義の担当をしたりなど自身の研究とは異なった業務を負うことになった。軍関係者にイタリアの情勢について講義をしたこともある（D2/7)。『リカード著作集』の編集作業の再開は第 2 次世界大戦終結後である。

9)　Kurz and Salvadori（2008）は、スラッファが作業を再開したのは 1942 年 6 月であるとして、スラッファに対するベシコヴィチ（A.S.Besicovitch）の数学上の協力をしめす複数のノー

Luxemburg）の『資本蓄積論』への言及があるノートも 1942 年 7 月のものである。1942 年 7 月から 1944 年半ばにかけてかなりのノートが継続的に作成されている（それ以降も断続的にあり 1947 年 1 月まで確認できた。D3/12/14 から D3/12/44）。それらの中には、『商品の生産』第 1 章に対応する内容を含んでいるものがあるし、著作の構成を記したものや著作の書き出しのような記述も含まれている。単一生産物・流動資本モデルに基づく基本的な命題は 1928 年までには明らかになっていたのかも知れないが、固定資本の価値評価や償却に関する問題、土地と地代の問題、そして結合生産物に関しては解決されるべき問題が多く残されていた。

『商品の生産』序文では「標準商品、結合生産物、それに固定資本のような特定の論点は、30 年代と 40 年代の初期に仕上げられた particular points, such as the Standard commodity, joint product and fixed capital, were worked out in the 'thirties and early 'forties」とある。「仕上げられた worked out」を文字どおり受け取れば、仕上げられた記述を出版用の原稿としてそのまま用いることができるか、もしくは全体の統一を取るために多少の手を加えることがあっても、それらの課題を後になって改めて検討するということはないだろう。1940 年代初期までのスラッファの研究の仕上がり具合を確認することは一つの課題である。

1942 年から 44 年のノートで特徴的な点のひとつにマルクス（Karl Marx）の『資本論』の用語がしばしば使われていることがある。例えば有機的構成や可変資本、不変資本などである。有機的構成と利潤率の関係を論じたノートがある。1927-28 年ころのノートでもマルクスへの言及があり、『剰余価値学説史』と『資本論』第 3 巻の参照が求められていたが、スラッファ自身の理論展開のなかではマルクスの用語は見当たらなかった（価値論講義ノートの中で、マルクス『資本論』への言及とは別に、一箇所「有機的構成」が使われていた

トの存在を指摘している。それらのノートに 1942 年 6 月の日付はあるが、それは第三者からベシコヴィチあての書簡の日付であったり、請求書の日付であったりする。つまり、書簡や請求書の裏面を使って、二人のやり取りがなされていたのである。ただし、かれらのやり取りの日付自体は記されていない。

が、例外的である）[10]。

その他この時期に属するものとして、トリニティ・コレッジのフェローで数学者のベシコビッチ（A.S. Besicovitch）の助力による標準商品の導出、q 体系の一義性の証明、$r = R(1 - w)$ の導出などが確認できる。ただ、賃金後払いで定式化された方程式より後の日付で賃金前払いでの方程式が記されているノートがある。また、小体系の構成が示されたノートがあり、結合生産の場合に負の価値の場合があることも発見されていた[11]。

VI　1950 年代

『リカード著作集』の本巻 10 巻の編集作業が終わったあと、1954 年 9 月から 12 月までの約 3 か月間スラッファはケインブリジを離れて旅行に出かける。主な訪問先は中国であった。シベリア鉄道を経由して中国・北京に 9 月 28 日に到着し、11 月 14 日に北京を出発して帰路についた。前後の期間イタリアにも滞在したが、イタリアから中国への往復の過程でモスクワや東欧諸国にも滞在した。

ケインブリジ戻って 1 か月ほどの後の 1955 年 1 月から約 3 か月、地中海の

10) Gehrke and Kurz（2006）で紹介されているようにスラッファは 1943 年にボルトキェーヴィチの論文「マルクス体系における価値計算と価格計算 I 、II、III」を読んだ。きっかけはスウィージー（P. M. Sweezy）の『資本主義発展の理論 The Theory of Capitalist Development』（1942 年）からの示唆と考えられるが、スウィージーの本をスラッファに教えたのはドッブ（Maurice H. Dobb）のようである。スラッファが所蔵していた本は、価値の生産価格への転化を扱った箇所にブックマークがされたまま保管されており（整理番号 Sraffa 1764）、その本に挟まれていたドッブの覚書（Re. Sweezy on Bortkiewicz）は、現在スラッファ・ペーパーズの I/50 として保管されている。ただ、この時スラッファが価値の生産価格への転化の問題に大きな関心を寄せたようには思われない。ボルトキェーヴィチに関しては、利子論や地代論の論文により大きな関心を寄せたと思われる。

11) De Vivo（2003, p.4）で、スラッファがリスィッチングを 1942 年に発見していたとして、当該ノートの D3/12/33/34（de Vivo は D31/12/33/34 と記しているが誤記だと思われる）に「21.4.42」、すなわち 1942 年 4 月 21 日と記入されていると報告している。しかし、当該の記述は 1942 年ではありえない。まず、ファイル D3/12/33 に収められているノート類のなかの当該の整理番号 34 の前後に整理されているノートの日付は 1943 年だということ。それになにより、当該の整理番号 34 は 1943 年 3 月 31 日付の請求書の裏が使われているのである。確かに、スラッファが記した日付は「42」と読めないことはないが、スラッファの書き誤りか、「43」と書いたものが「42」に見えるような形で残ったとも考えられる。

マヨルカ島のパルマに滞在し、そこで『商品による商品の生産』に結実する仕事を本格的に再開することになる（パルマには 1 月 7 日に着き、3 月 31 日に離れている）。

『商品の生産』の序文で「1955 年以後の期間には、本書が旧稿の束からまとめられたのであるけれども、（例えば「基礎財」と「非基礎財」の区別を結合生産物の場合にあてはめるような）その仕事の途中で明らかになったギャップを埋めることを除けば、ほとんど何も付加されなかった In the period since 1955, while these pages were being put together out of a mass of old notes, little was added, apart from filling gaps which had become apparent in the process（such as the adapting of the distinction between ‘basics’ and ‘non-basics’ to the case of joint product）」とスラッファは述べている。『商品の生産』が出版されたのは 1960 年 5 月であった。もし序文の記述を文字どおりとれば、ギャップを埋めるのにかなりの時間を要したことになる。つまりその点を除けば、旧稿の束から寄せ集めるだけで出版用の原稿はできたはずであるからである。「ギャップ」以外の部分は本当に旧稿の束を寄せ集めただけだったのだろうか。

スラッファはマヨルカ島での作業の最終段階で『商品による商品の生産』の第 1 部に相当する部分の草稿を作成している。出版に向けた通しの記述としては、おそらく最初のものであろう。マヨルカ島でスラッファは、まずはそれまでのノートを読み返し、整理したと思われるが、そのうえで著作の構想を練り（1955 年 1 月の終わりに著作全体の構成を記したものがあり、そして日付の記載はないが使われている用紙から 1955 年 2 月に書かれたと推測できる、現行版第 1 部にあたる部分の構成を記したものがある）、そのうえで、とにかく書き始めた模様である。それは 3 月 11 日から 27 日のことであった。スラッファ自身が「マヨルカ草稿 Majorca draft」と名づけた草稿で、A4 判より縦の長さがやや短い用紙 30 枚に、一部は裏も使って記されている。第 1 部に相当する内容が記されているが、標準商品の数値例はなく、現行版の「バランスを回復する価格変化」の説明に関する部分などは、詳しく議論するところまでは記述されていない。「標準体系の一義性」の議論もそこではなされていない。

q 体系は定式化されている。「日付のある労働量への還元」への言及はあるが詳しい議論はない。現行版のその章の最後の節、つまりは第 1 部の最後の節の「価格の下落率は賃金の下落率を超過できない」の議論は草稿の最後でなされ、現行版と同じ図が描かれている。マヨルカ草稿を書き始める前に記していた著作の構成には、「日付のある労働量への還元」という表現ではないが、それにあたると思われる構想は示されていた。

読者によりわかり易い記述を目指すということでは、その後さらに推敲が重ねられることになるが、どういう議論を展開するかということでは、1955 年 3 月までにはできていたといってよいだろう。ただ、マヨルカ島で執筆されたノートのなかには『商品の生産』にはまったく反映されていない議論もある。それは限界生産力理論を直接取り上げるといった内容であるが、その意味では出版する著作に含めるもの、含めないものはまだ確定していなかったともいえるのである。

スラッファはマヨルカ島からケインブリジに戻ったあと、著作の出版に向けてさらに作業を続けた。原稿のなかには「旧稿」の利用を指示している場合があるが、何度も書き直されている[12)]。

VII　印刷用原稿の作成

スラッファは著作の出版に向けて印刷用原稿の作成のため、手書きの原稿をタイプ打ちに出した（印刷のために書き出したものを原稿と呼ぶことにする）。手書き原稿が最初にタイプ打ちに出されたのは 1956 年 3 月で、現行版の 32 節まであった。この原稿はスラッファ・ペーパーズの D3/12/71 にファイルされ、カタログでは「“Copy used by typist” sections 1-32（2 docs）Mar 1956」と記されている。D3/12/71 に収められた手書き原稿にはかなりの修正や削除があり、この原稿の最終的な記述をたどるのは容易ではなく、書き直しが多い原稿のどの部分をタイプすればよいのか、タイピストの作業は大変だっ

12) スラッファは 1955 年 12 月 15 日から 1956 年 1 月 5 日、手術のため入院したが、その間でも執筆をしていた（D3/12/61）。Kurz and Salvadori（2001, p.258）によるとヘルニアの手術であった。

たろうと思われる。第 1 章の数値例は、最初の 2 商品の場合に関しては数値全体が現行版の四分の一の値、3 商品の場合では三分の一の値であった。

1956 年 8 月には、最初のタイプ原稿に加筆修正が加えられ、手書き原稿が追加されたものが 2 回目のタイプ打ちに出された。これは D3/12/72 にファイルされカタログでは「“Copy used for second typing” sections 1-41（1 doc）Aug 1956」と記されている。この時点での著作の書名は、仮の題かもしれないが、「OUTLINE OF AN ECONOMIC SYSTEM」となっている。目次（章と節区分とそれらの表題）は第Ⅴ章までできていたが節の数は 42 であった（現行版は 44）。現行版の 41 節までの原稿がある。

1957 年 4 月頃までにスラッファは、現行版の固定資本の章の手前までの、結合生産を含むタイプ打ち原稿を作成しているが、結合生産に関する各節の内容は現行版にはほど遠い。その後、1957 年 8 月くらいにかけてスラッファはかなり集中して作業をしている。この時期にスラッファが書き残したものを見るかぎりでは、序文の「結合生産物、それに固定資本のような特定の論点は、30 年代と 40 年代の初期に仕上げられた」という記述は受け入れ難い。

スラッファが序文で言及した「ギャップ」はいつ埋まったのだろうか。基礎財と非基礎財の区別を結合生産物の場合にあてはめる以外に「ギャップ」はなかったのだろうか。「最後のギャップ」が埋まったのは、実は 1958 年 1 月 30 日のことであった。De Vivo はスラッファの手帳の 1958 年 1 月 29 日（水）の欄に「FINIS filled last gap in my work (Rent)」の記入があることを紹介している（De Vivo 2003, p.3）。この「最後のギャップ」が埋まった日付に関して、D3/12/96:1 には 1958 年 1 月 30 日（30 Jan. 1958）との記載がある。

「最後のギャップ」が埋まる前にスラッファは印刷用原稿の準備を始めていたが、「最後のギャップ」が埋まってからでも印刷用原稿ができるまでに 1 年以上かかったことになる。この間、原稿にどのような改訂が加えられたのか、それを明らかにするためには、残された原稿の詳細な検討を必要とする。また、タイプ打ち原稿が作成されてからのことであるが、スラッファは何人かに

原稿あるいは校正刷を読ませている[13)]。それが『商品の生産』の仕上がりにどれだけの影響をもたらしたのかはわからないが、出版を急ぐ様子はみられなかった。

『商品による商品の生産』で示されているように、分配関係の相違によって諸商品の相対価格は異なる。しかし、それは賃金が前払いか後払いかでも（つまり労働者に支払われる賃金を利潤率計算の際に資本に含めて計算するかそうでないかでも）異なる。『商品の生産』では賃金は後払いで定式化されている。国民所得の分配分としての賃金である。だがスラッファにおいてそのような定式化が最初から（すなわち 1920 年代から）されていたわけではない。1942 年の定式化と 1956 年の定式化を比較した 1956 年 12 月のノートが残っている。

いずれにしても、1955 年以降の「旧稿の束からまとめる」作業は簡単なものではなかったことが、残されているノート類から推察できるし、出版用のタイプ原稿の作成段階、印刷所への出稿の段階、校正の段階で、それぞれ決して小さくない修正がほどこされていて、スラッファのこだわりといったものが垣間見ることができる。

印刷のための原稿が大学出版局の担当者に渡されたのは 1959 年 5 月であった。索引を除くすべての原稿（全文タイプ打ちで、修正、数式の記入などが鉛筆書きされている）が渡されている。校正で追加、削除など修正がはいるが、基本的にはこの時点で『商品による商品の生産』は出来上がったといってもよいだろう。

最初のタイプ原稿が作成された 1956 年 3 月から、最終的に印刷のための原稿が大学出版局に渡される 1959 年 5 月まで 3 年余の年月がかかっているが、この間、数学的な詰めを行っていたことが推察できる。スラッファは序文で 3 人の数学者の名をあげて謝辞をのべているが、早くに亡くなったラムゼー（Frank Ramsey）は別にして、ベシコヴィチとワトソンには最後の段階まで

13) ワトソン（Alister Watson）、ガレッニャーニ、セン（Amartya Sen）、ドップなどである。ガレッニャーニは原稿全体を通して読んだようである。印刷用原稿の前の草稿段階で、現行版 81 節の草稿をドップが読んで、記述の修正案をスラッファに示し、それが採用されたことを示すノートが残っている（D3/12/81）。

数学面の助力を仰いでいた。特にワトソンは印刷用原稿、校正刷を読んでいるし、初刷本にあった数式の誤りの指摘を H.G. ジョンソン（Harry G. Johnson）から受けた時も、その検討をスラッファはワトソンに依頼した。なお、数学面に関してはチャンパーナウン（David Champernowne）からの助力もあったようで、H.G. ジョンソンからの指摘に関しては、スラッファはチャンパーナウンにも検討を依頼した。『商品による商品の生産』第 2 刷（1963 年）で、スラッファは序文の後に追記をして、数式の誤りの理由を、「最終時点での記号法の変更 in a last-moment change of notation」によるとしているが、ワトソンとチャンパーナウンの 2 人に検討を依頼したということは、単に記号法の変更によることがその理由だったのかどうかには疑問の余地がある[14)]。

初校が 1959 年 9 月 23 日にでき、11 月 26 日には出版局の担当者に戻されている。再校は 1960 年 1 月 12 日にでき、1 月 28 日にスラッファの校正は終わっている。そして三校を 2 月 17 日にスラッファは受け取り、2 月 18 日には返している。正式な出版契約書は 1960 年 2 月 23 日付で交わされている（D3/12/112:45）。

『商品による商品の生産』のイタリア語版は英語版のすぐあとに出版されているが、イタリア語版はどのように準備されたのであろうか。スラッファの手帳をみると 1959 年 12 月 18 日から 1960 年 1 月 14 日までミラノに滞在し、イタリア語版の作成作業をしていたことがわかる。英語版の初校を終え、再校が出るまでの間である。おそらく英語版の校正済み初校に基づいて、友人のラッファエレ・マッティオリ（Raffaele Mattioli）とともにイタリア語版の作成がなされた。口述によるイタリア語訳を速記者が筆記（おそらくはタイプ）し、それに基づいて修正を加えて出版用の原稿を作成した模様である。12 月 18 日から 1 月 11 日まで、ほぼ連日その作業は進められた。1 月 12 日には版元のジュリオ・エイナウディ（Giulio Einaudi）に原稿が渡された。しかし、校正段階でかなり手が入ったようである[15)]。

14) ラムゼー、ワトソン、ベシコヴィチなど数学者からのスラッファへの助力に関しては Kurz and Salvadori（2001）、（2007）など参照。

15) イタリア語版の作成に関しては Kurz and Salvadori（2001, pp.261-262）、藤井（2009）など参照。

おわりに

『商品による商品の生産』は難産のすえ誕生したといって過言ではない。それは 30 余年という永い懐妊期間だけでなく、生みの苦しみがあった。刊行後、改訂の試みがあったり、それに続く研究のノートがあったりするが、『リカード著作集』の総索引の作成作業もあり、スラッファ自身の研究の続きはほとんどなされなかったようである。しかし、スラッファが書き残した膨大なノート類には『商品による商品の生産』には収められなかった内容で比較的まとまった記述も少なくない。クルツを中心とするグループがスラッファ・ペーパーズを含めたスラッファの著作の出版に向けた編集をしているということだが、スラッファの著作の出版よりも、未公刊資料を利用した彼らの論文の発表が先行している。筆写ないしパソコンへの入力でしか利用できない多くの研究者のためにも、1 日も早い公刊が望まれる。

参考文献

千賀重義（2002）「スラッファ価値論講義とリカードウ解釈」『横浜市立大学論叢』社会科学系列第 53 巻第 1 号、1 月。

藤井盛夫（2009）「ピエロ・スラッファ『商品による商品の生産』ビフォー・アフター」『経済集志』第 79 巻第 3 号、10 月。

松本有一（1992）「スラッファの人事問題におけるケインズの力」『経済学論究』第 46 巻第 2 号、7 月。

松本有一（2009）「スラッファの生産方程式の端緒を探る―予備的考察」『経済学論究』第 63 巻第 3 号、12 月。

De Vivo, Gioncarlo（2003）“Sraffa’s Path to *Production of Commodities by Means of Commodities*. An Interpretation”, *Contributions to Political Economy*, Vol.22.

Gehrke, Christian and Heinz D. Kurz（2006）“Sraffa on von Bortkiewicz: Reconstructing the Classical Theory of Value and Distribution”, *History of Political Economy*, Vol.38,No.1, Spring.

Gilibert, Giorgio（2003）“The Equations Unveiled: Sraffa’s Price Equations in the Making”, *Contributions to Political Economy*, Vol.22.

Gilibert, Giorgio（2006）“The Man from the Moon: Sraffa's Upside-down Approach to the Theory of Value”, *Contributions to Political Economy*, Vol.25.

Hollander, Samuel（2000）“Sraffa and the Interpretation of Ricardo: The Marxian Dimension”, *History of Political Economy*, Vol.32, No.2, Summer.

Kurz, Heinz D.（1998）“Against the current; Sraffa's unpublished manuscripts and the history of economic thought”, *The European Journal of the History of Economic Thought*, Vol.5, No.3, Autumn.

Kurz, Heinz D. and Neri Salvadori（2001）“Sraffa and the mathematicians, Frank Ramsey and Alister Watson”, T.Cozzi and R.Marchionatti(eds.) *Piero Sraffa's Political Economy: A Centenary Estimate*, Routledge.

Kurz, Heinz D. and Neri Salvadori（2007）“On the Collaboration between Sraffa and Besicovitch: The Cases of Fixed Capital and Non-Basics in Joint Production”, Heinz D. Kurz and Neri Salvadori ; with Christian Gehrke, Giuseppe Freni and Fausto Gozzi, *Interpreting Classical Economics: Studies in Long-Period Analysis*, Routledge.

Kurz, Heinz D. and Neri Salvadori（2008）“On the Collaboration between Sraffa and Besicovitvh: The ‘Proof of Gradient’ ”, G. Chiodi and L.Ditta (eds.) *Sraffa or An Alternative Economics*, Palgrave Macmillan.

Porta, Pier Luigi（2001）“Sraffa's Ricardo after fifty years, A preliminary estimate”, Evelyn L.Forget and Sandra Peart (eds.) *Reflections on the Classical Canon in Economics. Essays in honor of Samuel Hollander*, Routledge.

Salvadori, Neri（2005）“Introduction”, *Review of Political Economy*, Vol.17, No.3, July.

Signorino, Rodolfo（2005）“Piero Sraffa's Lectures on the Advanced Theory of Value 1928-31 and the Rediscovery of the Classical Approach”, *Review of Political Economy*, Vol.17, No.3, July.

Smith, Jonathan（1998）“An Archivist's Apology: The Papers of Piero Sraffa at Trinity College, Cambridge”, *Il pensiero economico italiano*, Ⅵ(1).

Sraffa, Piero（1951）“General Preface” to *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I , Cambridge University Press.

Sraffa, Piero（1960）*Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press（菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産―経済理論批判序説』有斐閣、1962 年）